



祝叢大全

秋之部上



蕉翁發句說叢大全卷第四

葛飾

素丸

著述

全

南臺

檢校

秋部上

祓ふの本は素ごしきいそ星は乾

袋 云七夕の夜勿れも合歡の本は素ごしきいそふへと也眠
らばたのふへとと祓ぬのふよふせり
解 云新後拾遺集七夕の
恋を恨もいふて一痕のうらよひはくまむむ合歡の河ふ



今案よ万葉集ゆた合歌本海部の本もねありのきともよあ
ふと六帖よこの言成出でかうのきと清り合歌本のきふ
よこの言成りふこの言成りをうけて新撰六帖も
かかると歌あもかきり新六帖の言成の言成すの言成すの
とも七の言成もこの言成すの言成

あさごほふ我ハ飯くふととて我

解 云世をたれ飯の飯かきふととて我を飯くふととて我
有麻さるる言成りつとつとを觀想の句へ男汁とせり新成妙
あさごほふ——**袋林** 此句を出さば

説 唯つづつた。幸力と送る。觀想ともまひが。又め此うし
ハ男哉とつと西妙ゆらだ。飯かきと起る飯くふ。有麻する
者。人情の今日わして。何の秋而もしや。句解ワの。言成り
——。○予按さるる。此句意ハ。飯敷の言成。たの言成り。りま
小我ハ斯く息老ハ筋骨も健ふまひて食物もさるるに
言ふ男しと。その言成りもあはれお對して。一層子法より此取
と。言成りせり。家十成の俳諧也。活法尤九あり。微妙の場也。
たもことと云字眼也。世の人ハ。舞とつて。はやくも。いやはの
たも。あまの。言成り。古人の。延とあ。う。糞と。杖と。も
りひて。人の。尻馬よ。言成り。と。人あ。う。翁ハ。却て。よ。つ。の。

唐中ひりり此方の心も何々や **袋林** 此句を出入候

説 此句は解しば事書と略し出候は事書に依て

手事書と事書小山句と也 **解** 又綱云事書

深と事書と略して 此句は略して候は

報をのり事書と事書 **説** 蕉翁行狀記云 路通 丹野

て骸骨の画は骨相觀の初と也 此句は略して候は

月十日此の吟也 此句は略して候は 元禄七年七

かまふ句也 ○此圖ハ世ハ一休骸骨と云書りて此句

この語は 此句は略して候は 此句は略して候は

女配遇の候は 此句は略して候は 此句は略して候は

川くわう古版近版之古板ハ殊勝あるものニ馬も是
るんつきく画けり候は 句意ハ此句は略して候は

阿そ十と世却て江戸をさる古

解 云客舎并州已十霜 歸心日夜憶 咸陽無端更渡桑乾

水却望并州 是故郷也 此詩の心ハ此句は略して候は

説 此詩の心ハ此句は略して候は 此句は略して候は

此詩をさして 此句は略して候は 此句は略して候は

小言ハ此句は略して候は 此句は略して候は

と云ふ也 ○句意ハ翁の舊里ハり候は 伊賀あり

岐阜部留別四句の内也。さうけて。あつくと。さうら。○句
選よ。ハ。う。く。と。う。け。て。あ。つ。と。さ。う。ら。よ。低。く。も。た。ま。ま
き。さ。あ。め。し。是。又。う。け。て。あ。つ。と。さ。う。ら。よ。低。く。も。た。ま。ま
害。さ。め。じ。あ。つ。と。さ。う。ら。よ。低。く。も。た。ま。ま。今。ハ。さ。あ。め。く。向。上。の。人
お。く。是。ハ。さ。あ。め。く。彼。ハ。あ。つ。と。さ。う。ら。よ。低。く。も。た。ま。ま。子。孫。傳。子。の。説。々
あ。つ。と。さ。う。ら。よ。低。く。も。た。ま。ま。さ。あ。め。く。向。上。の。人。風。流。あ。つ。と。さ。う。ら。よ。低。く。も。た。ま。ま
あり。七。十。餘。年。あ。つ。と。さ。う。ら。よ。低。く。も。た。ま。ま。當。時。ハ。極。め。じ。極。め。じ。も
癖。言。成。屋。し。

井 買うては別から得るはれ

袋 云。是。世。人。ハ。住。吉。の。市。に。井。を。賣。て。世。渡。り。と。計。ら。ぬ。也。我
も。昔。小。つ。ま。て。井。ハ。買。き。ら。ぬ。月。に。面。白。き。と。ん。く。井。買。う。て。後
時。の。分。あ。と。の。望。り。二。月。を。さ。る。ぬ。ふ。あ。つ。と。さ。う。ら。よ。低。く。も。た。ま。ま。井。買。う。て。ハ。昔。の
氣。月。を。さ。る。風。雅。あり。望。り。後。翁。の。風。情。推。て。計。分。ハ。解。云
莊。子。斗。斛。成。而。天。下。人。始。爭。是。も。た。に。か。め。り。井。買。う。て。ハ。物。を。う。ら
る。と。さ。る。隱。士。の。か。め。り。不。也。か。後。而。さ。る。出。と。と。謀。り。
句。情。さ。る。林。此。句。を。出。す。後

説 袋 注 一向の妄注。さうら。よ。低。く。も。た。ま。ま。翁。の。さ。あ。め。く。向。上。の。人。世。渡。り。氣
風。雅。氣。さ。あ。め。く。向。上。の。人。や。あ。つ。と。さ。う。ら。よ。低。く。も。た。ま。ま。世。渡。り。靡
の。僧。あ。つ。と。さ。う。ら。よ。低。く。も。た。ま。ま。九。倍。の。さ。あ。め。く。向。上。の。人。説。と。さ。あ。め。く。向。上。の。人。さ。あ。め。く。向。上。の。人。

不埒也。解 去來抄曰此句如何
 去來曰ふあかりとらふ中の七文字をくく發句ハ詩文不
 ぞ人の身よりくくく人ハ外と云物ハ亦帶の具ありとい
 此外買て後ハ鍋もや〜く桶をほ〜く世の中此隠者ハ和
 よりあやまると鑑ハ中〜也と云々○住吉名勝志云
 摂津國住吉太神宮毎年九月十三日寶の市とて大社奉
 且社勢社司大祿直涉〜出仕〜て神供之商人并物さ〜
 あり〜と云々賣吉兆ありとて諸人買て歸家と云々此句
 寶の市あり此吟也。元祿七年の吟也。

義虫菴

今宵たきよ〜路の月を十六里

林 云新古今源二位於改こよひきりしす〜吹風を御りけ
 り〜の〜の月を誰〜しけあよるや〜二百里の外と十六
 里ふ〜〜の種の樹のま程を歩の歌向あや此句の公を
 〜〜の〜の月を誰〜い〜ん我を〜〜と云々〜あ〜
 一編の部あるおえと云々の自撰此の〜法下玄音
 の説也發句もそふり〜つ〜や深意可尋る也後人の公少を

ともしつゝ一のりふ此句と書いてハ超極大秘訣なり。知人
決してふし其解を志すかたの人をけんめい翁の句いつても
掌中子握る金一知止の道其止を断つて去るべし。わん
だもきつらど美濃の五行後五筑と改む坊も此句意おとらく天下小
知人かゝりや。やうもかや。すまひ一〇又或説よび一
翁混本寺の佛頂和尚の才子と稱す。時おくごうたけかみ
勅をりり一佛頂ハ一のごとく佛指と判ちしれ。綺語
怪詞何の益ありやと。毎度叱くま一。或時近里ハ時齋
なりて佛頂翁とともふんけしふ。乃くも亦俳諧のてと
まふ。おんけしふ。翁のいづく。佛指は今日のち。目前のち

よていとは。やうけし。ふ。ま。は。そ。ふ。り。る。本。様。よ。て。一。句。せ
り。と。あり。し。時。ら。吟。也。と。し。め。ふ。佛。頂。は。く。考。て。日。善。哉
々々俳諧をいふ。海をいふ。のよそと。殊に感せしき。く
のらハ制一強り。と。や。禅。意。よ。叶。つ。こ。ろ。後。何。ら。と。ら。ふ
と。ま。此。説。も。亦。不。審。也。此。句。ハ。野。ざ。う。一。記。行。よ。出。て。馬
上。吟。と。題。さ。る。よ。し。佛。頂。と。同。乃。ハ。ま。は。し。是。不。審。也。も
一。や。仏。頂。の。ち。り。一。時。さ。け。小。せ。一。句。を。叫。し。す。く。せ。ん。と。お。ん
ん。〇。お。ん。け。し。け。行。よ。素。堂。亭。よ。も。此。度。記。行。二。三
句。の。香。逸。の。よ。し。と。ら。り

金昌寺の柳ちりほむ

庭掃くいでむや門よちる柳

〔袋〕云此句同行の人とふきて寺と出る時の句と云ふは白は心ハ我々の柳はこころちりくよ列をりゆきさゆきと庭はふこころと庭を掃く如きと也〔解〕云加州金昌寺よりこころちり世説曰郭林宗每行宿逆旅輒躬自灑掃及曉去後人至見之曰此必郭有道昨宿處也これらの心かちりて句を殊勝也

〔説〕句選の意はあも金昌寺の柳ちりむむとちりり〔袋〕本説とあらずしてちりり的のちりて推量しあふも堪らり〔解〕郭

林宗がちりり如く柳ぬものも也是亦本説と云ふ附會せしふや○奥の細道ふ云大聖寺は城外金昌寺と云ふふと云ふ程加賀の地也曾良もあ夜此ちりこちりてよもちりり秋風すやちりり山と柳一宿隔千里と云ふ我も秋風とすく衆寮小部と云ふ何けかのちりり讀經の夢澄まふ瘡板吸て食堂よ入る六歳前のふと云ふ一忽年ちりり堂下よと云ふと云ふ僧とも紙硯をかく階のりこちりて退来るおちりり庭中此柳ちり色をちりりて此句を云極ちりりの乃小出ちりりもけ通し○東西夜話云何が金昌寺と云ふ先師一夜の宿をを宿と云ふ庭掃て出るやと云ふ史柳は源もゆかりと云ふと云ふかか事志しと云ふ

袋の注の如き。雲をつらむ虚妄を。伝せん人のたれ。小。憐ふ。を。院と。出ん
 の也。学。益。と。あり。ふ。へ。く。も。○ 考。る。小。四分律行事鈔釈道宣下三
 十五卷 僧像致敬篇第二十目十六丁 曰佛告女曰掃佛地得五福一自
 心清淨他人見已亦生清淨心二為他愛三天心歡喜四集端正
 業五命終生善道天中云云又同卷七丁導俗化方篇第二十
 四三十丁曰凡以穢倍之身入寺踐金剛淨刹法地自多傘儀式
 若去時須贖其過隨施多少示有不空若布絹香油澡豆華水
 此入寺法中國傳之矣余更略出護過要術云云此説と證と
 と。へ。し。門。中。千。那。ハ。律。師。也。夜。話。な。も。も。翁。き。く。世。れ。し。も
 何。ん。郭。林。宗。ハ。僧。ふ。云。ま。れ。い。好。し。て。又。質。函。わ。あ。ま。を。ん。送

施乃在家と。寺院とハ。る。う。り。多。へ。し。律。法。去。寺。の。法。と。り。て。し。れ
 る。翁。の。貧。し。て。只。掃。地。と。り。て。一。宿。の。恩。を。あ。げ。ぬ。は。終。り。と
 殊。勝。ふ。と。何。ん。れ。何。ぞ。郭。林。宗。と。考。へ。ん。や

あうくや日ハつまなくを秋乃月

袋 云是秋の月也言やま西山言山蓋言天とつまなくも早言
 秋乃月言秋乃月言の月言入言る言は言ら言し言や言る言 解 云新古今
 集旅人の神言さ言く言る言を言秋言風言の言夕言日言さ言し言き言山言出言け言る言一言是言等
 の言小言わ言ら言し言き言る言秋言風言樂言言言外言ふ言ま言く言翁言中言歴言二言章言此言秀言逸言と
 社日記言あ言ら言し言り言 林 此句と出言る言候言

ま偽の如く思ふにうらな句さのけをさり

よーおめえ

そめえおめえ我よさうせよ坊の妻

袋 云吉野の奥或坊より書と信じてま向れぬ我も世にわらふ御も
たぬ人よおめえおめえ何とも取捨するまを御しそめえ書もわらふ
幸禊子と信じてま向れぬ白也林 云河をよりおめえおめえ何らみよ
一おめえの杜風とま向れぬおめえおめえ何らみよおめえ何
おめえおめえ思ひま向れぬおめえおめえ何らみよおめえ何
僕しておめえおめえおめえおめえおめえおめえおめえおめえおめえ

礎方といふ鐘の打つともま向れぬ鐘の附會の信は
言活のりま向れぬおめえおめえ何らみよおめえ何
もようおめえの藁ま向れぬおめえおめえ何らみよおめえ何
と也只読ハりのうく幸是と信じてま向れぬおめえおめえ何
よーおめえおめえおめえおめえおめえおめえおめえおめえおめえ
の町坊おめえおめえおめえおめえおめえおめえおめえおめえおめえ
家店也挽お細工と高ひて箱根の湯おめえおめえおめえおめえ
説 袋 坊と僧坊と魚おめえおめえおめえおめえおめえおめえ
らんや一向安語不可用也向選おめえおめえおめえおめえおめえ
うらま都て袋注よおめえおめえおめえおめえおめえおめえおめえおめえ

名月や池とわづらうてはもすづら

林 云々の面よ照月ありとて人定家心は枯れもさぬし
 りい物とてり山谷秋水清く底ありと水澄りて清光乃
 り満なきもえとてり句ハ眼前也山更とてりありとてり
 月とありと園の隙とていはいの思ひくらなるも老とむるか
 く我のこむり情とてり夜とてり述懐の心あり下吟
 此句ハ初とてり云下して芭蕉庵一夜佳良なる人ハ宵に
 ハ竹のたこむやんはしやるより下りて句とてり詩と吟
 とや光も天よかりを池あり氷とてり五とあり五とあり

さし中々海して暁ハ士峯小光とてり見物の榮枯も親とてり
 月のれよきのとてり詠の致れぬとてり是も句外の意味あり
 其月の辨りて 益ありハ下署す 袋 此句と出下吟

説 林 の源文章とてりんて却て雑々紛々句の餘情あり
 らかあり模羅合糊也とてり知る人文字小し予が不才とてり餘多の
 人ハ小なりとてり人てりハのてり又園のひよりの
 一旅翁の心骨ありとてり独居ありとてりあはれとてり
 隠者とてり是翁とてり妄評後の人とてり
 妄見也 解 佳良の風情景色文章にそらんやとてりこの
 其の風流雲とてり森と筆ありとてりやハあり

○巻第四

此の序き、そのまゝのこゝに解ありて、一句の意をけがらぬ。
初巻の序き、そのまゝに見ゆる事遠く、一、老輩の我がふ紡り、
増て初巻の人をたぬふい、そのまゝに都て上古より、詩歌の注抄
のまゝとらん、文をば、まやふ質朴、正しく記さば、要とする、さ
はふよりて古抄を、はより人の耳ふ、なて、その中より、亦、發明、亦、
後哲を、多くし、也。終夜の潮ふかきて、夜一よき、癖もや、他
とめ、らり、處士、峯ふ、と、さ、ま、る、を、さ、ふ、と、た、い、い、や、
○又詩歌連俳、いづれの月、いづきのむ、情ま、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
と、引、い、で、ん、ハ、一、生、涯、尋、り、り、と、も、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
おも、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
おも、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、

小つゝ、い、ん、ら、い、媚、ふ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
云、初、より、曉、す、を、池、と、め、ら、り、月、と、泳、め、あ、さ、さ、さ、さ、さ、
ず、い、ふ、月、と、惜、む、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、
ハ、狂、氣、人、な、ら、あ、い、あ、い、あ、い、あ、い、あ、い、あ、い、あ、い、

海むく、そ、な、あ、を、つ、一、首、の、青、宗因

名、月、や、え、つ、め、て、も、お、ぬ、お、ぬ、よ、さ、湖春

是人情の流る風雅ありて、かざらば、天然の妙、也

○徂徠譯文筌蹄曰、終夜ヨモスカラ通霄トモ霄ヨリ、曉迄ニ至ルヲ云、歴
史醫書ナトニハ、誠ニ夜通シノ心也、文章詩歌ノ上ニテハ、切ニ
思ヒツヨク、夜ヲ更ス事ヲ見センタメニ、ヨモスカラト云也、と云

初學のため不足と奉てあしむ。翁と狂氣人あしむるをうれ
向意ハハハ。月とるる心とりて推さる。狂風雅と正統を
後説と俟のし

雲とくく人と体ひる月えりぬ

林云西行中くふぬく雲のう体とる月とりてあしむる

ありきまけありやあひゆらん云袋解此句と出さす

説又ふふとくく雲のう体とる月とりてあしむる

くるとありいつとも是あらん不知○東西夜話曰求聽文通

の條下云此紙面と通先師よけ類三四句もく度く連考

師ふ福とられ我も公むつうくは定白是も雲ふ体ひ八月
の不賞敬とやるめえ可者な格式よりとすいふ人ふは芭蕉
もあやとけくこれきりとも因く意味よとる合て芙蓉ふ
ふまひいあせたらあふはたるとは月お目めしるえりて
様はとえてあふはとる人物の腕とる甲きいさめ
あふりてぬく世の人己う女房子え倦くとも思ぬあふりて
あふりて男女は情も羽子板のまぬよあふりてんはまふりて
あふりて言おくのやとくぬ人目お園と紙うひ又いかな
あふりてし知りいふ娘とさうんうとあふりて死の地日よ海月
ハ終おるんといふあふりて意の部よあふりてあふりてこれ終る

予らあふま介一 吾輩よりいふに
 或人け句ハ何ハの歩めてせし
 古人の語のたしきとるるべし
 連字をよみ古詩古歌よりいふて
 我俳諧ハ家ハの相好くまじき詩
 人の評判ハ是を是非あへて通し
 此俳句ハ海ぬと云ハ古人の格とぬ
 不自由なるものありて有ん
 予らあふま介一 吾輩よりいふに
 西人の言を引出 洋も亦非也 先師乃
 公ハ月の句ハ是ハ海ぬと云ハ古人の格とぬ
 休て面白くもて也と何の古亦も辱らまを入師もき句也
 是ことと云ハ正統の流と云事ハ又世もさす
 したるれハ今又あふ介一 吾輩よりいふに
 學者のゆりしる雲おくのあり一 吾輩よりいふに
 古人の格式小なるまじき字條

予のみま字二二のハ尔兼ハなハ一ハ是ハ二四の病ありと云ハ一
 かる人のつる二三と云ハいハ彼人の云雲ハなれてと云ハ一 吾輩よりいふに
 曰家ハいと書物の古式と云ハ俳諧ハ只物の本情ハなせて何ハ
 一ハ云ハ拙ハ也古人の二四と云ハ一ハなると云ハ一 吾輩よりいふに
 二四或ハ一ハ口ハなすりて語路ハ一ハ古人のいハ一 吾輩よりいふに
 ハまぬと云ハ一ハ二四と云ハ一ハ口ハなすりて語路ハ一ハ古人のいハ一 吾輩よりいふに
 ハハ古人の睡ハの二四ハ一ハ一ハ古人のいハ一 吾輩よりいふに
 下畧也ハ一ハ初也ハ一 吾輩よりいふに
 ○再考と云ハ世説曰司馬太傅齋中ニ夜坐于時天月明淨都無
 纖翳太傅歎以爲佳謝景重在坐答曰意謂乃不如微雲點

きりゆりも。止りなく。是れ非あり。り小随ひて疑ひと。関車漢ふ
 之此類多し。詩前にならぬのり也。増て俳諧なるを。たとい古
 嵐をこりこりも。定めづ。り。然るに。持て。芭。子。も。不
 可也。此句も。前ふ。云。く。き。ひ。い。ろ。ふ。だ。く。の。句。也。只。句。意。と
 の。こ。り。ぬ。び。を。な。り。け。き。と。や。○ 巴 峽 の 曉 猿 は 他 國 なる。り。り
 聞。こ。叶。り。ど。日 本 の 山 家 近。く。ハ。王 子 遠。九 月 の 夕 清 比。に。を。ひ。り
 て。ひ。く。を。極。り。て。悲。く。哀。なる。物。と。や。猿。と。す。て。人。悲。
 む。人。此。猿。多。流。多。と。あ。り。れ。ま。ざ。ん。や。是。は。ハ。思。ひ。か。け。は。不。其。終
 乃。親。い。い。ふ。と。や。悪。く。そ。の。ハ。猿。ま。い。儀。も。き。世。と。親。志。を
 量。り。て。句。中。ハ。扇。を。り。杜。風。と。あ。り。ま。い。と。流。る。は。季

の入。が。ぬ。こ。も。名。人。の。も。事。也。が。家。不。依。感。仰。と。き。事。也。猿。と。は
 よ。く。評。せん。ハ。猿。の。句。不。後。屋。一。是。ハ。捨。子。乃。句。と。猿。ハ。け。合。
 物。と。知。べき。也。

右 十 有 六 章

○ 卷之四 早

